

挨拶

年長の秋までに身に付けたい「お受験力」

言葉づかい

相手の目を見て話す

30 完全文を話す

幼児の話し方の特徴のひとつが、会話を単語で成立させようとすることです。

問「今日の朝、何を食べましたか？」

答「パン」

問「誰と一緒に朝ごはんを食べたのですか？」

答「お父さんと弟」

このような答え方では、小学校の入学考査は突破できません。「パンを食べました」「お父さんと弟と一緒に食べました」と、完全文(主語は場合によっては省略)で話さなければなりません。

面接ではこの点、つまり、単語だけの応答ではなく、なるべく完全な文で答えることができるかということをチェックしています。面接ではいちいち「それがどうしたのですか？」などとは聞き返しません。できていればプラス評価を得ますが、できなければマイナス評価がつけられるだけです。

我が家の子供たちがよく言った言葉に、「ミルク！」というものがありません。「ミルクちょうだい」の意味だといことはわかっていますが、「ミルク！」と言われただけでは、私は決して動きません。

もう一度「ミルク！」と聞こえたら、「ミルクがどうしたの？」と聞き返します。「ミルクが欲しいの。だから、ちょうだい」と子供が言えば、「わかりました。はじめから『ミルクちょうだい』って言えるよね？」と言い聞かせました。

同様のケースはいくらでもあります。「ご飯!」「靴下!」等々。「何が、どうだ」という構文にせずに単語だけを叫び、おまけに人をお願いごとをするのに、そのような言い方を認めるわけにはいきません。

家庭でできる対策としては、完全文で話すまで子供に言い直させることです。

母「今日は誰と遊んだの？」
子「ゆうたくん」
母「ゆうたくんと遊んだの、って言うてみよう」
子「ゆうたくんと遊んだの」
母「よく言えました。ゆうたくんと遊んだのね。何をして遊んだの？」
子「お砂場」
母「お砂場で遊んだの、って言おうね」
子「お砂場で遊んだの」

このように根気強く繰り返せば、「私（僕）は、ちゃんとお話しないといけないんだな」とわかってきます。子供でも繰り返し言い直させられることは好みませんので、「はじめからちゃんと言うほうがいいな」と思うようになります。そして、面接でもしっかりした構文で受け答えができるように定着するでしょう。

親が「これは絶対に身につかせたい」と思うことは、親自身が実践しつつ子供に根気よく教えることが必要だと思います。子供がすぐにマスターしないからといって根負けしてしまうと、子供たちは「なあんだ、やらなくていいんだ」と、あっという間にそっぽを向いてしまいます。

キラッと光るポイント

面接では、単語だけの応答ではなく、完全な文で答えることができるかということをチェックされています。



家庭での実践ポイント

親が「これは絶対に身につかせたい」と思うことは、親自身が実践しつつ子供に根気よく教えることが必要だと思います。

31 「わかりません」は考えた上で言う

考査でのマイナス評価につながる現象に「沈黙」があります。面接官や採点担当者は、子供が何も話しはじめないので、「どうしたのですか？」と聞きます。それでも「……」と沈黙が続きます。うつむいたり、関係ないほうをキョロキョロしたり、視線が浮いてしまったり。しまいには泣きべそになってしまう子供もいると聞きます。

これでは面接どころではありません。しまいには、「もういいです」と、その質問を打ち切って次の質問に移るか、時間によっては面接終了となります。考査においては、沈黙は金どころか、マイナス評価なのです。残念ながら合格を期待することは難しくなってしまう。

かといって、わからないと思えば即座に「わかりません」「できません」と答えるのは望ましい姿ではありません。まったく考えもせずに即答するようでは、練習してきた質問にしか答えることの出来ないマニュアル児とみなされます。

マニュアル児は決められたことはうまくできますが、想定外のことは自分で考えて対処できませんし、しようとしません。質問に懸命に答えようとする姿勢がないのです。思考する努力をしない子供を学校が歓迎するわけではありません。

実際に、少しでもわからないことを聞かれると「わかりません！」と即座に答える子供は相当数いるようで、多くの学校の校長先生があきれているとも聞きます。例えば、我が子に「○○ちゃんはこのお話のどこが面白いと思った？」と聞いて、「わかんないよ！」と言われたらどんな気がするでしょうか。「考えもしないで……」と思いませんか。学校の先生方も同じなのです。

望ましい姿は、質問されたことに対して一生懸命考え、思うことを率直に話すことです。そのうえで、どうしても答えがわからない場合は、「わかりません」と言って構いません。もちろん、質問の意味がわからなければ、「もう一度お願いします」と聞き直します。わからないことは遠慮せずに聞き直してよいということを

教えておきましょう。考査では緊張しますし、遠慮がちな子供ならなおさらです。

学校は、答えの中身自体を判断しているわけではありません。質問に対する受け答えの姿勢、言葉遣い、素直さを見ています。ですから、自分なりに考え、どうしてもわからない・できないと判断した時点で「わかりません」「できません」と答えてもマイナス評価はしません。むしろ、考えた末にはっきり状況を伝えられたということで、子供の素直さとまじめさを認めます。

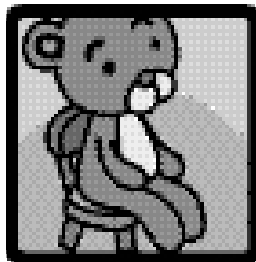
家庭では、子供が自分で考え、自分の意見をはっきり言える環境を作ることが大切です。「どうしてわからないの!」「なんでできないの!」と叱るのは厳禁です。「どこがわからないのかな?」「できないと思ったのはどこかな?」など、「どこ」「何」をキーワードとして質問すると、子供にもわかりやすいようです。

それらの質問を通して、つまづいた点が発見されればしめたものです。どうしたらわかる(できる)ようになるか、補足的な説明をしたり、考えるヒントを与えたりします。子供はヒントをもらうことで「ああ、そうか!」と気づくことが多々あります。

「またできないの?」「この間お勉強したでしょ!」「何でこんなことがわからないの!」と叱られてばかりですと、子供は、「どうせまた怒られるから黙っていよう」と口を閉ざしてしまいます。それは親子関係においても危険なことです。気をつけたいと私自身常に思っています。

キラッと光るポイント

質問されたことに対して一生懸命考え、どうしても答えがわからない場合は、「わかりません」と言って構いません。



家庭での実践ポイント

「どこがわからないのかな?」「できないと思ったのはどこかな?」など、「どこ」「何」をキーワードとして質問しましょう。

32 「はい」「いいえ」とはっきり返事をする

子供がなかなかきちんと返事ができない、と不安を抱える保護者が多いと聞きます。恥ずかしがったりしている場合はまだよいと思いますが、大人の問いかけに対して、まるで聞こえていないかのように、すーっと通り過ぎていってしまう子供が意外とまわりに多いと私も感じます。なぜ、人の問いかけに応じないのか、それはコミュニケーション能力に何か問題を抱えているのかもしれませんが。

小学校の入学考査では、試験官の問いかけをまっすぐに受け止めて返事できるかどうかチェックされます。子供の回答の内容そのものが重要ではなく、答え方が見られているというのはこの意味なのです。

相手とまっすぐに向き合ってコミュニケーションすることができるかどうか、このことを学校は知りたいと考えています。年長の秋にもなれば、恥ずかしいから親の後ろに隠れてしまう、黙ってしまうという段階からは抜け出していることが望まれます。相手が大人であっても向き合う姿勢があることが望まれています。

もっとも特徴的なチェック項目は、「はい」と返事ができるかどうかです。特に、自分の名前を呼ばれたときに大きな声ではっきりと「はい」と返事ができることは基本中の基本です。

考査ではあらゆる状況で受験生に質問をします。行動観察や制作においても、考査の途中で受験生全体に、または個別にさまざまなことが質問されます。「はい、そうです」「いいえ、ちがいます」「それは～です」など、質問に応じた答えがはっきりできれば、よい評価が得られることは間違いありません。

「うん」「そう」(肯定)、「ううん」「ちがうよ」(否定)などの言葉遣いをすれば、マイナス評価は避けられません。目上の人に対して丁寧語を使うことは、親がきちんと教えておくべきことです。

名前を呼ばれたときに「はい」と答える練習は簡単ですし、幼児なら喜んで参加します。「あなたのお名前は〇〇〇〇さんですね？」と子供に聞き、「はい！」と言えるようにする、ただ、それ

だけです。

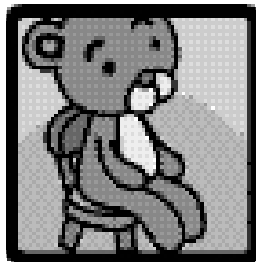
そこから発展させ、大人に聞かれたことへの受け答えには必ず「はい」「いいえ」で答えるように導きます。3歳児が「はい」「いいえ」と妙にハキハキ答えるのも不自然ですが、切り替え時期としては、自他の違いを意識し始める4歳ごろからが適当だと思います。年長になってからでは遅すぎます。

幼稚園・保育園では、担任の先生とは「うん」「ううん」「～だよ」などの友達言葉を使っているかもしれませんが、小学校では先生に対しては友達感覚ではいきません。先生には尊敬語、丁寧語を使うということを徹底させます。子供に小学校受験をさせるのなら、第一に身に付かせるべきことと言っても過言ではないほど大切です。

初対面の大人から「こんにちは、お名前は？」「お年はいくつ？」などと聞かれた際に、恥ずかしくてもぞもぞと親の後ろに隠れたり、ニヤニヤして答えないのは4歳までなら可愛らしいと捉えられるでしょうが、それ以降は首をかしげられます。4歳後半になったら、大人の質問に恥ずかしがらずにきちんと答えができるようにしましょう。

キラッと光るポイント

「はい、そうです」「いいえ、ちがいます」「それは～です」など、質問に応じた答えがはっきりできれば、よい評価が得られることは間違いありません。



家庭での実践ポイント

「あなたのお名前は〇〇〇〇さんですね？」と子供に聞き、「はい！」と言えるようになる、それだけです。

51 自分の考えていることを言う

面接や行動観察で沈黙してしまう子供は歓迎されにくいことは別項目で書きました。大人に対してだけでなく、子供同士の関係においても、沈黙してしまうタイプは心配です。黙っていても、相手に自分のことを理解してもらえない。言葉に出して、初めて相手は自分の考えていることがわかる。このことを子供にも教えましょう。

例えば、人から嫌なことをされても黙ってしまえば、相手は問題ないと思ってしまいます。いじめの構造のひとつがこれにあたります。嫌なことをされたら「嫌だ」とはっきり言えることが大切なのです。

グループで何か相談して決める課題が出されたときに、自分の意見を言わずにいると、誰も自分のことは取り上げてくれませんから、他の人の考えで決まってしまう。それが後になって不満であっても、どうすることもできません。

言葉に出すといっても、好き勝手なことを並べればよいということではありません。あくまでも、自分が考えていることを他の人に伝えるということです。そうすることによって相手に働きかけることができるのです。その大切さを子供に話して聞かせましょう。

必死に自己主張しなさいということではありません。自己主張ばかりするのではわがままと同じです。自分の言いたいことを言うだけ言って終わり、というのも身勝手な行動ですから要注意です。大切なことは自分の考えを表明し、相手との接点や折り合いを見つけようとするということです。幼児であれ、友達との付き合いのなかで、他者との双方向のコミュニケーションの大切さを学んでいるはずです。

考査、特に行動観察ではコミュニケーション能力をチェックされます。必ずと言っていいほどグループでの課題が出されるのは、それぞれの子供がどのようなコミュニケーションの取り方をするかを見るためなのです。自分の言いたいことをどんどん言う子、

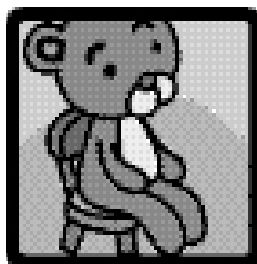
人の意見に反論する子、全体を見渡す子など、さまざまなタイプがいるでしょうが、自分の意見を一言も言えずにじっとしている子はあまり評価はされません。どのような考えを持っているかわかりませんし、参加意欲も計りにくいからです。

口下手なタイプであれば、何がそうさせているのか、じっくり考えてみるとよいでしょう。親が何でも先回りして言うてしまう、やってあげることはありませんか？ 子供に意思表示をさせる時間的余裕を与えていますか？ 自分の考えを言わなくても物事が進んでいってしまう状況に慣れてしまえば、あえて自分の考えを表明しようと思わなくなります。

子供をそのような状態に置いていないでしょうか？ 子供が何か言うまで、何か言い切るまで待ってあげましょう。子供の話の途中で腰を折るようなことはありませんか？ 最後までしっかりと聞いてあげましょう。子供の話に批判的なことを言いがちではありませんか？ 子供の意見はどのようなものであれ、いったん受けとめてあげましょう。いきなり批判がましいことを言わずに、「そう、それは良い考えね」と認めてあげます。指導が必要なときは、そのあとに「こうしたらもっといいかもね」のように別の考え方を示します。いったん受け入れられたことで満足感を得ている子供は、比較的素直に別の考えに耳を傾けます。

キラッと光るポイント

大切なことは自分の考えを表明し、相手との接点や折り合いを見つけようとするということです。



家庭での実践ポイント

親が何でも先回りして言うてしまう、やってあげることはありませんか？ 子供に意思表示をさせる時間的余裕を与えていますか？

52 大きくなったらなりたいものを話す

「大きくなったら何になりたい？」と初めて子供に聞くときは少しドキドキしますね。生命保険会社が毎年行っている調査によれば、男子ではスポーツ選手（野球、サッカー）、学者、食品店店員、大工、消防・救急、医師、教師、女子では食品店店員、看護師、幼稚園教諭、動物飼育士、音楽教師（ピアノ）、歌手、教師、医師、美容師が上位10種に入る職業であることは十数年変化がないそうです。

実際にその仕事をしている人たちを見て、格好良い、素敵だという印象を持っているから、自分もそれをしたと思うわけですから、子供たちがいかに大人たちの仕事振りを見ているかがよくわかります。

子供が将来なりたいと答えるものは率直な思いの表れです。たとえテレビのスーパーヒーローであったり、非現実的な職業であっても、批判的なコメントをしては子供の夢が傷つきます。子供の思いを尊重してあげましょう。

小学校の入試考査でも、面接などで「大きくなったらなりたいものを教えてください」と質問されることがあります。学校が知りたいのは、子供がどのようなことに興味を持っているかということです。子供らしく夢をもっているか、どうしてその夢を抱くようになったのかを、子供の答えから知りたいと考えています。

というのも、子供が将来なりたいものには、育っている環境が反映されるからです。漫画家になりたいといえ、マンガを読んでいることがわかります。「会社の人」と答えれば、親が会社員として誇りを持って働いているかもしれませんが、他に夢を感じさせる体験をさせていないのかと勝手に思ってしまう。家庭環境の雰囲気を感じるのです。

また、子供にとっての将来の夢は、コロコロ変わることも珍しくありません。数ヶ月前は幼稚園の先生になりたいと言っていたのに、今はアイドル歌手ということもあります。その時々々の興味の対象が反映されるのです。

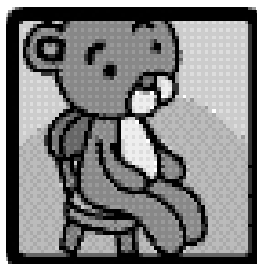
子供の夢を肯定したうえで、「どうしてあなたは〇〇になりたいの？」と理由を聞きましょう。「かっこいいから」「かわいいから」という理由では満足できません。「どこがかっこいいの？」「どういふところがかっこいいと思うの？」と掘り下げます。些細な理由でも子供にとっては大切な理由ですから、自分の言葉で言えるように自信を持たせてあげましょう。

親自身の幼い頃の夢を話して聞かせると、子供の目がキラキラしてきます。「お母さんが小さいころはね、パン屋さんになりたかったの。おうちの近くにおいしいパン屋さんがあったんだけど、おいしいパンが毎日おなかいっぱい食べられるのはパン屋さんだと思ってたの。大きくなってから本当のパン屋さんにはなれなかったけど、お母さん、おうちでパンをよく焼いているでしょ？」と話せば、子供は乗り出してきます。そして「〇〇ちゃんは何になりたいの？」と聞けば、「えーとね」と話が展開していくことでしょう。

私の娘が年長のころの夢は、「絵を描く人」でした。理由は、「こんなことしてみたいなと思うことを紙の上でつくれるから」とのことでした。偶然にも私の小さい頃の夢と同じで驚きました。

キラッと光るポイント

面接などで「大きくなったらなりたいたいものを教えてください」と質問されることがあります。学校が知りたいのは、育てている環境が反映されるからです。



家庭での実践ポイント

たとえテレビのスーパーヒーローであったり、非現実的な職業であっても、批判的なコメントをしては子供の夢が傷つきます。子供の思いを尊重してあげましょう。

53 人前で好きな歌を歌う

小学校受験で合格する子供にはさまざまなタイプがいますが、共通する特徴のひとつが、必要以上に恥ずかしくない、ということです。度胸が座っていることが必要条件ではありません。緊張するなというほうが難しい注文でしょう。ただ、本来の自分を出せないほど恥ずかしがりですと、合格するのは難しいでしょう。本当にその子の持っている良い部分が表れないからです。

度胸試しではありませんが、考査の中で「好きなお歌を歌ってください」と言われることがあります。また、集団で何かの歌を歌いましょうと指示されることも考えられます。そのとき恥ずかしくて歌えないとマイナス評価になってしまいます。何かしてくださいと言われたときに、頑張ってみようという気持ちのある子がプラス評価を得るのです。

歌が上手か下手かはまったくといって良いほど関係がありません。もし非常に素晴らしい歌声を聴かせることができれば驚嘆に値しますが、それは歌が特技だということであり、合否に直結することではありません。自分の知っている歌で歌ってみようと思うものを一生懸命歌う子供が期待されます。大きな口を開けて、背筋を伸ばし、上を向いて一生懸命歌う。そういう姿勢の子供はどの学校でも好まれます。

歌の選択は、童謡が望ましいことは確かです。テレビコマーシャルの歌や歌謡曲はやはり歓迎されません。テレビ番組の主題歌も、教育的な番組のもの以外は対象から外すことが無難でしょう。幼児ですから、「ぞうさん」「チューリップ」程度の、短く、歌詞が間違えにくく、音程も単純な童謡が適しています。

童謡は幼稚かと心配することは、5、6歳の子供ですから堂々と歌う落ち着きと度胸があれば立派なものです。1つ、2つは通して歌えるように日ごろから練習させましょう。家族が相手でしたら練習するうちに恥ずかしい気持ちもなくなります。度胸をつけるために、祖父母や友達、気の置けない来客にも機会を見つけて歌う練習をしましょう。

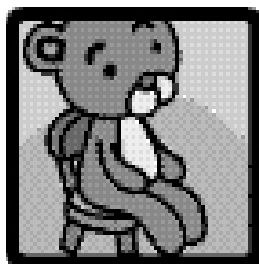
はじめは恥ずかしくて歌えないことがあって当然です。私たち大人が、急に人前で歌を歌えと言われたら戸惑いますね。「○○ちゃんが歌ってくれると楽しくなるから、歌って欲しいな」などとおだてることも必要です。やおら歌い始めることができたなら、静かに真剣に聴きます。歌い終わったら、拍手喝さいです。「上手に歌えたわね！　すごい、すごい！　本当に上手だわ。また歌ってね」と誉めちぎりましょう。自分の歌を誉められて嬉しくないわけがありません。子供は内心、「歌うのも結構楽しいものだな」「またチャンスがあれば歌ってみたいな」と思うにちがいません。

恥ずかしがらないこととは正反対ですが、自分が目立とうとする傾向のある場合は注意が必要です。人を差しおいて自分が自分がという面が見られる子供は、自己中心的だとみなされ、マイナス評価の対象です。

「～してくれる人は手を挙げてください」と言われたときに、「はいはいはい！」と飛び上がらんばかりに騒いだり、ほかの人の発表を妨害するような言動は厳禁です。まわりを見渡すことができるように指導する必要があります。恥ずかしがりやではないからと安心せず、子供の行動を客観的に把握し、問題があるようなら早めにより方向に導いていきましょう。

キラッと光るポイント

大きな口を開けて、背筋を伸ばし、上を向いて一生懸命歌う。そういう姿勢の子供はどの学校でも好まれます。



家庭での実践ポイント

家族が相手でしたら練習するうちに恥ずかしい気持ちもなくなります。度胸をつけるために、祖父母や友達、気の置けない来客にも機会を見つけて歌う練習をさせましょう。

54 自分で答えを見つけようとする

小学校の入学考査の頻出分野のひとつに、「推理」があります。箱の中に手を入れ、何が入ってるか当てる、図形の系列パターンから空欄に入る図形を答える、鏡に映る映像を答える、サイコロの絵を見て裏側の目を答える、観覧車などの動きを見て先に起こることを答える、などが代表的な例です。

いずれも、与えられた情報と、自分の持っている経験・知恵から事象を推理する能力を見ることを目的とした問題です。それには、経験があることが必要です。つまり、子供には多種多様な実体験があることが必要なのです。

多種多様な体験と言っても、学習に関することだけでなく、実生活に関することすべてが関係します。よくペーパー対策に具体物を使った理解が基本となるというのも、このことの一部です。

身の回りのことを自分ですること、手伝いをする事、体を使っていっぱい遊ぶこと、自然と触れ合うこと、親と一緒にさまざまなジャンルの本を読むこと、同年代だけでなく上下の年齢層の子供と遊ぶこと、いろいろな大人に会う機会があることなどを通じて、子供は日常的、非日常的に多くのことを学びます。これらの豊かな経験が子供の心に多くの引き出しを作り、初めて出会う課題にも引き出しを開けて知恵を絞ることができるのです。

すぐに「わかんない～、教えて～」 「ねえ、やって～」と親に頼ってばかりでは、表現は多少大げさですが、自分で生き抜いていく力が不足しています。「とりあえずやってみよう」と考え、やってみる力のある子供を小学校では求めています。

すぐに「わかんない。助けて」というタイプの子供は、自分で取り組む意欲が低い、集中力や根気がない等の要因が考えられますので、それらの改善を図ります。「どうしたらいいか考えてみて」「きっと○○ちゃんならできるわよ。やってみて」と、自分で考え、実行するように導きましょう。たとえ子供の考えが間違っていたとしても、間違いを責めてはいけません。挑戦したことを褒めることが先決です。

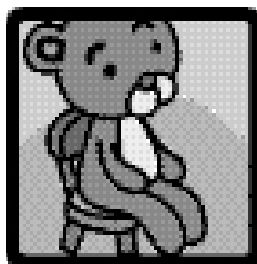
そのうえで「こうしたらどうかな？」と正解が見つかるように再度指導します。そこで正解を見つけられたらいいですが、もし「わからない」と混乱するようでしたら、強く押すことはせず、「ママはこうしたらいいかなって思うけど、〇〇ちゃんはどう思う？」と投げかけてみます。子供が良い反応を示せばしめたものです。

我が家の子供はこだわる性格で、自分でやるとなったらとことんやるタイプです。私が助言をしようものなら「ママは黙ってて！」ともものすごい剣幕で怒られるのでアドバイスしようにもできないことが多々あります。しかし、どうしてもわからないときは一人で格闘したあとで、「助けて〜」と言います。そのときには、直接正解を教えることはせず、上記のように「こういうふうにしてみたらどう？」とヒントを与える程度にしています。

そうすると「あ、待って」と、またやる気を取り戻すことが多く見られます。そのような子供を見ていて思うことは、私はヒント与え係に徹しようということです。答えを教えることは簡単ですが、それでは子供が自分で考える力が伸びないだろうということです。

キラッと光るポイント

「とりあえずやってみよう」と考え、やってみる力のある子供を小学校では求めています。



家庭での実践ポイント

「どうしたらいいか考えてみて」「きっと〇〇ちゃんならできるわよ。やってみて」と、自分で考え、実行するように導きましょう。